

第13回国診協現地研究会に参加して

— ウエルネスタウン・最上町 —

国診協地域医療・学術部会委員

吉見昭宏（広島県・芸北ホリスティックセンター所長）

平成11年度の現地研究会は、直診を町づくりの一つの拠点（ウエルネスプラザ）とされている山形県最上町で、約250名の参加者が、瀬見温泉観松館に宿をとり、6月24日、25日の2日間行われた。この方式は、直診の今後の方向性を示唆するものと思われる。

研修第1日目

午前10時より中央公民館で開講式が行われ、今井正信・国診協会長の主催者挨拶のあと、中村仁・最上町長が歓迎挨拶を述べられた。中村町長は、「健康に勝る幸せなし」を信条に、町民の健康を守ることが首長の使命と考え、また町村合併を行った経緯から「和が第一」と考え、それぞれの地域が公平で均衡ある発展を念頭に、調和のとれた特色ある三地域拠点整備を行い、拠点形成型健康長寿まちづくりを熱っぽく語られたが、言葉の端々に町を愛し、町づくりに全身全霊を傾注されていることがうかがえた。中村町長が若々しく、大きく、神々しく見えたのは私ばかりではないだろう。

多くの来賓の方々を代表して、渡邊芳樹・厚生省保険局国保課長、渡辺満夫・山形県健康福祉部

長が挨拶を述べられ、引き続き、佐藤俊浩・ウエルネスプラザ所長より、最上町および施設の概要説明と今後の課題と展望について、雄弁で歯切れのよい発表が行われた。

最上町は面積330km²の広大な町で、JRの駅が7つあり、人口約1万2千人、高齢化率25.2%の積雪地である。発表のなかで注目すべき点は、「ウエルネスセンターもがみ」の構築にあたって、①昭和62年に病院長からの進言を受け、慎重な検討を重ね、議会の意見なども十分に参考にして、平成2年3月に首長としての町長の理解と決断が行われた、②議会の同意と熱意、③町民の理解を得るための集落座談会の実施、④有利な財政負担の検討——などで、拠点形成型健康長寿まちづくり（図1）と医療と連携した健康福祉のまちづくり基本機能（図2）も参考になった。最後に、ウエルネスプラザ所長としての方針を示し、今後の行動の礎にしたいと結ばれた。

続いて、郷土芸能のアトラクションがあり午前の部が終了。

●ウエルネスプラザ

午後1時からは6班に分かれ、バス移動で施設

図1 拠点形成型「健康長寿のまちづくり」

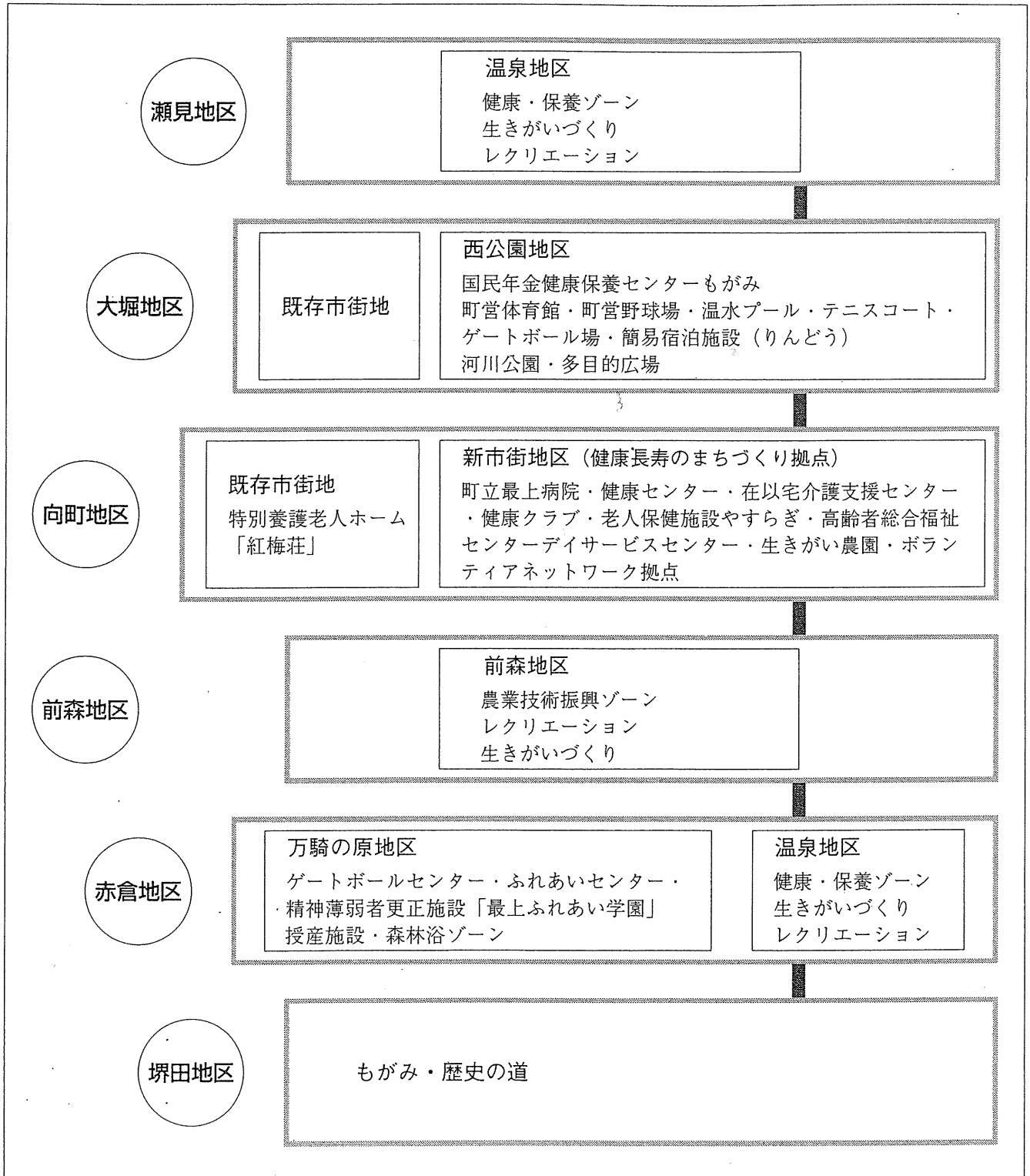




写真1 ウェルネスプラザ全景

研修へ。車窓からは鉄筋コンクリート造りのプラザの、周りの田園風景とマッチしたすばらしい外観が目映った（写真1）。

足早にバスを降り、地域住民参加を狙った健康パーク（緑地公園）、園芸農園施設（生きがい農園「生き生きハウス」）が整備され、生きがいづくりや生産活動にも気配りがされている。

病院としての特徴的な取り組みとして、毎週水曜日の夜間外来診療の実施（振替として木曜日午後休診）、地域中核病院とテレビ電話による遠隔医療システムの導入と遠隔医療システムネットワーク事業の導入、病院給食室から老人保健施設、デイサービスへの給食供給、リハビリテーション室のリハビリテーション提供システム（図3）、地域看護班の設置と看護ネットワーク（図4）があり、非常に参考になった。

健康長寿のまちづくりのシンボルである2階建ての健康センターは、保健・医療・福祉の総合窓口として位置づけ、在宅介護支援センターを併設し、保健婦、地域看護スタッフ、国保および福祉介護係が常駐し、予防を優先した保健事業や検診の実施、健康づくりのための指導や訪問看護、介護に関する相談など地域包括ケア体制を確立している。ここでの特徴的なエリアとして、病院とつ

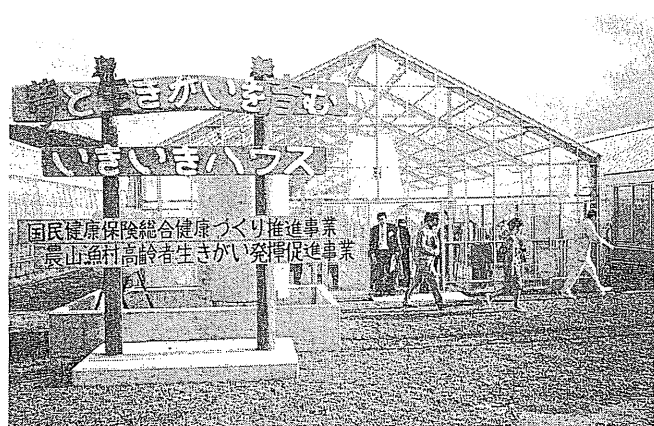


写真2 生きがい農園「生き生きハウス」

ながる通路は展示ギャラリーを兼ね、ホールの喫茶コーナーとともに町民の交流と憩いの場となっている。

100人を収容できる視聴覚室では、健康教室、ケアワーカーの研修、講演会など多目的に活用され、そのほかに集団指導室や訪問看護準備室などが配置され、プラザの中核としての機能を発揮している。

●健康センター（図5）

健康センターの特徴的な取り組みとしては、在宅とのテレビ電話による遠隔医療システムの導入がある。次に社会福祉協議会事務室、訪問介護室、日帰り介護、健康クラブが配置されている高齢者総合福祉センターは、ノーマライゼーションの理念に基づき、バランスのとれた共存社会の実現と交流の促進を図るため、温泉をフルに活用した健康・体力づくり、憩いと交流の拠点として、広く住民福祉の増進と福祉意識の高揚、さらに相談、趣味、娯楽等の機能を備えたサービスの提供を行っている。

やはりここでも、利用者の立場に立つての利用日時が設定されている。とくに訪問介護、日帰り介護の365日開所と、早朝・時間延長の取り組み

図2 最上町地域包括ケアシステムー医療と連携した健康福祉のまちづくり基本機能

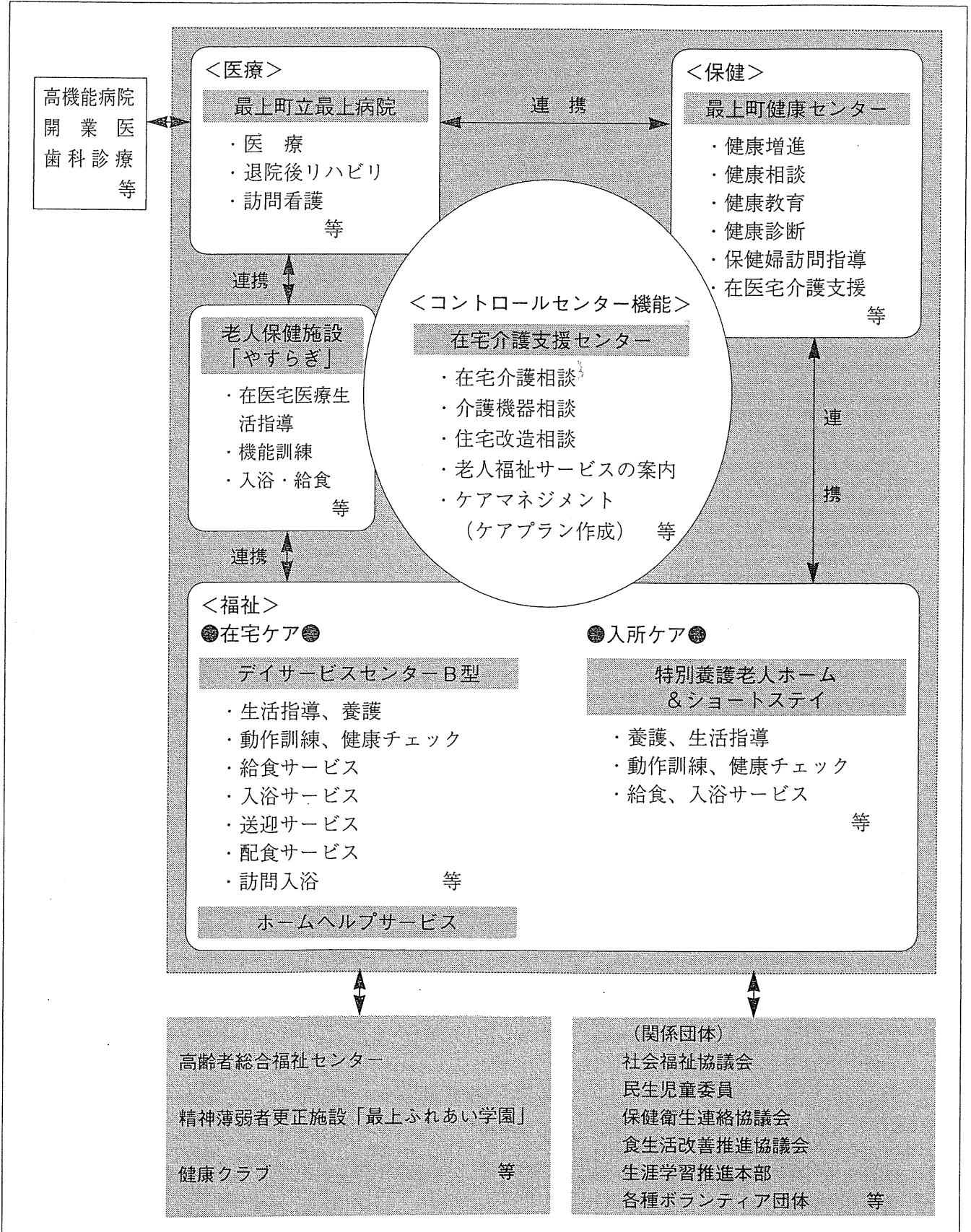
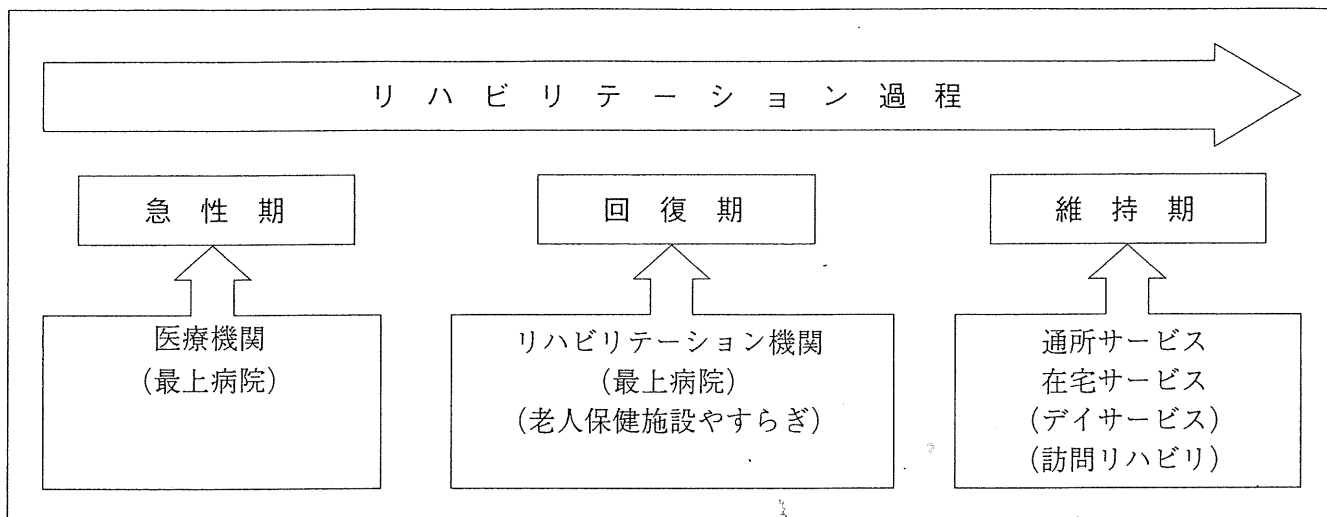


図3 地域包括ケアにおけるリハビリテーション提供システム



とインフォーマルなサービスとの連携が参考になった。また、健康クラブが温泉を活用した最上町らしさが出ていてよかった。

老人保健施設「やすらぎ」は、プラザ内にあり、各部署との連携が常時保たれており、利用者にとってベストの管理下にあるのがいい。

プラザの外に出ると、町民のやすらぎ、憩いの場として健康パークや高齢者や町民の活動の場として生き生きハウス（写真2）が整備されている。生産を通じた高齢者の生きがいがづくり、産業の振興、自然環境資源の有効利用と人的交流の促進を図り、町全体の活性化を図る目的で運営されている。

直診（社会資源）を核として、健康長寿のまちづくりの一つの拠点として、町民のライフケアを支援する地域包括ケアシステムが具現化され、中村町長自らが、われわれ直診の今後の方向性を示唆されている感じがした。

中村町長の根底にあるノーマライゼーションの理念に基づく町づくりを具現化した社会福祉法人「豊寿会」という民間活力を導入し、町行政、町民、利用者、ウェルネスプラザと融和した特別養護老人ホーム「紅梅荘」、東京都の委託を受けた知的障

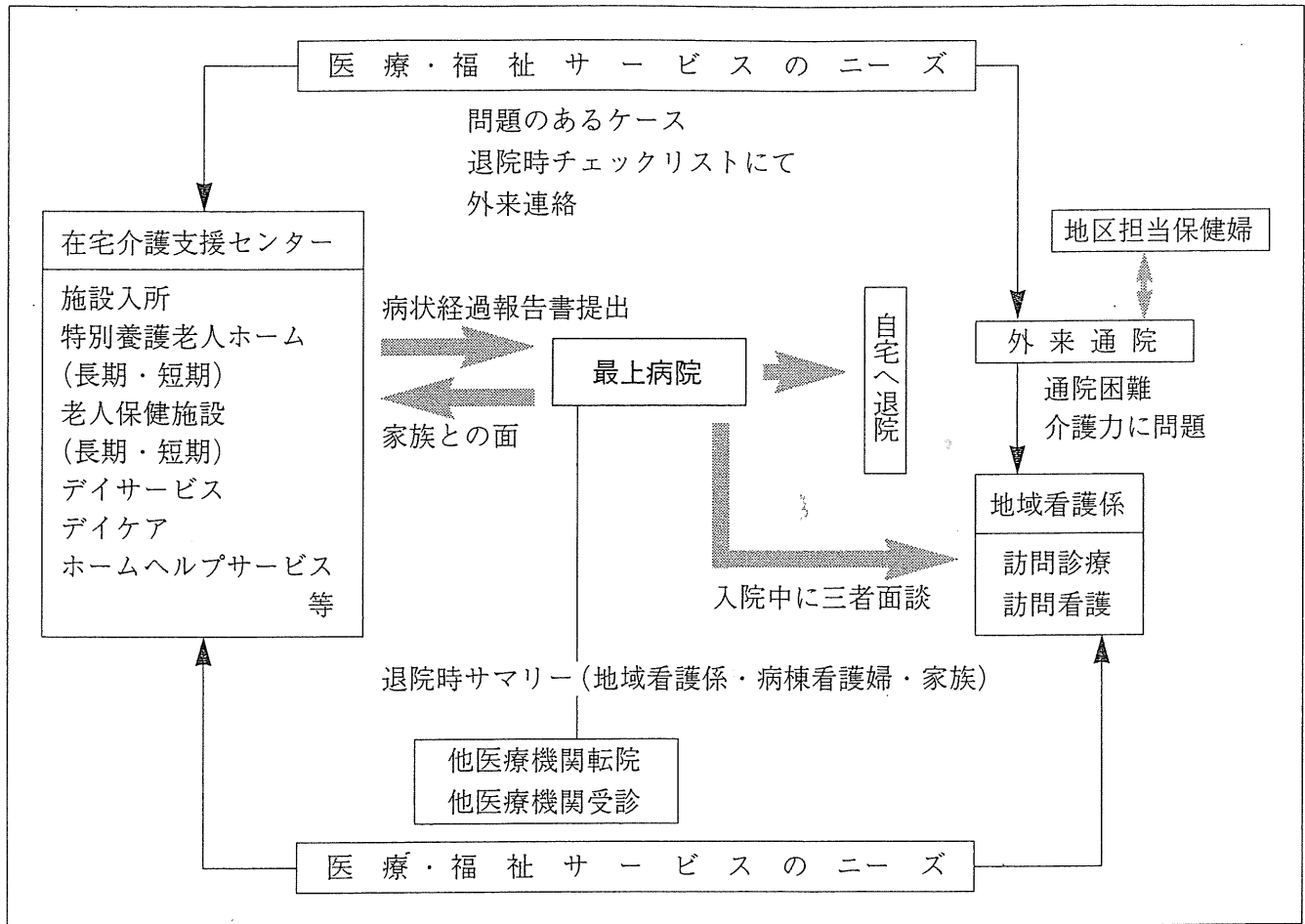


写真3 知的障害者更正施設「ふれあい学園」

害者更正施設「ふれあい学園」（写真3）を見学、最後に、健康・体力づくり、憩いの場としての運動公園「最上西公園」を訪れた。ここは、建設省の都市公園整備事業で整備され、施設の管理運営は教育委員会が、直接の管理は最上町地域振興公社に委託されている。拠点形成型町づくりの整備の手法を学ばせてもらった。

各部署の説明者は、健康長寿まちづくりに対して、それぞれが何をなすべきか認識されており、それぞれでの取り組みを自信を持って説明されていた。

図4 看護概要と連携—看護ネットワーク



視察行程を進めていくに従い、組織機能の一体化が行われていて、首長の卓越した指導力、先見性をもって、全員で健康長寿のまちづくりが進められている様子を知ることができた。「中村町長のような首長をわが町にも」と思われたのは私ばかりではないだろう。

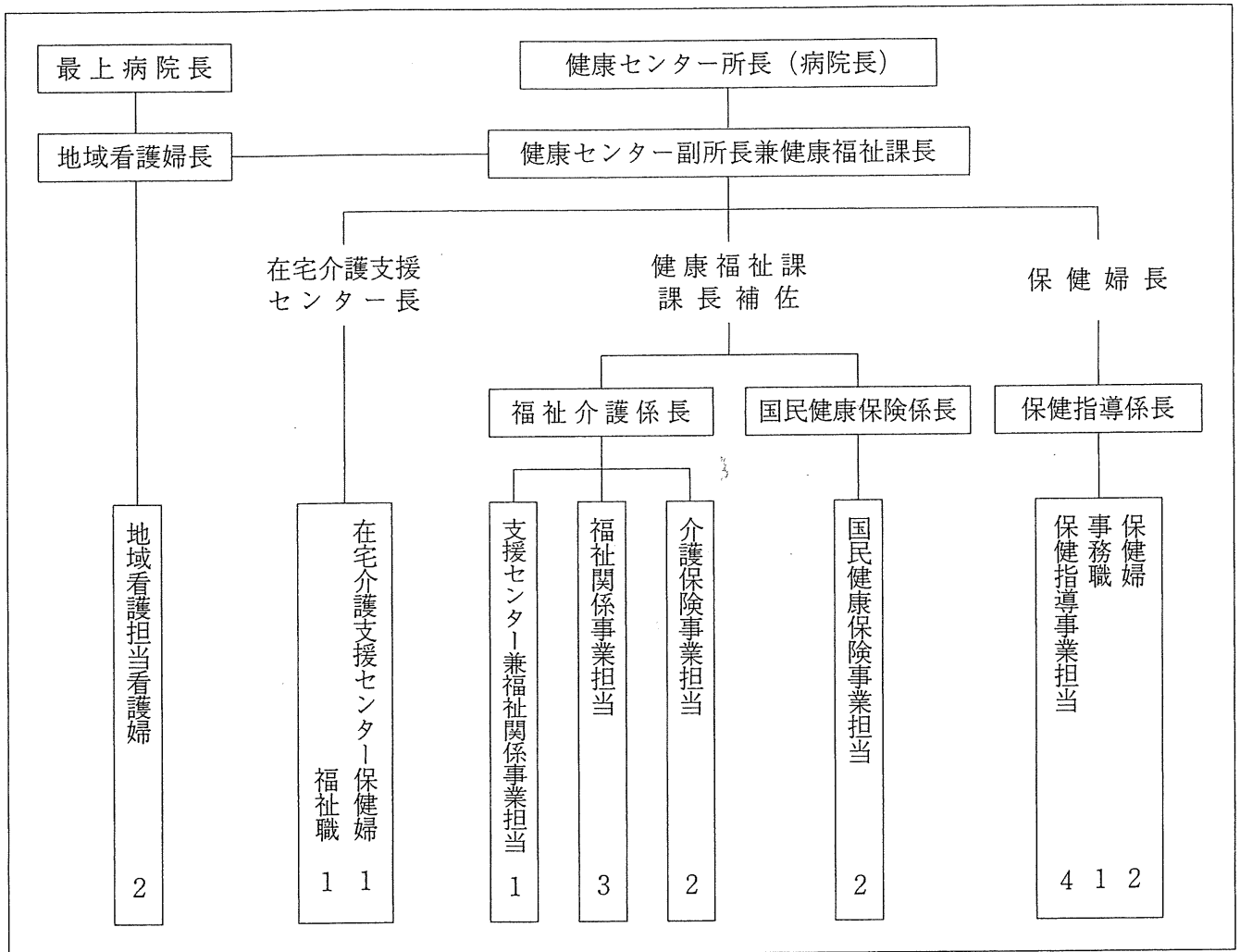
第1日目の視察研修を終え、午後6時30分から観松館にて、畳の上で膳を囲みながらの懇親会が和気あいあいのうちに進められ、言葉を交わしてみたかった方々とも話が盛り上がっていった。私も中村町長、渡邊課長、北海道芽室町の常山誠町長とも歓談でき、有意義な時を過ごさせていただいた。

研修第2日目

中央公民館にて、9時から渡邊国保課長の「医療制度の抜本改革の検討状況と介護保険最新情報」と題する特別講演が行われた。

医療制度の抜本改革に関しては、診療報酬体系、薬価制度、老人保健制度、医療提供体制のそれぞれの見直しと課題、検討の経過および予定を、介護保険制度に関しては、介護保険事前サービス調整対策の趣旨と内容、介護保険制度の予定どおりの実施を強調、最後に、療養型病床群のうち介護保険適用部分の利用者数、必要入院定員総数の見込みを立てる場合のポイントの解説があった。

図5 最上町健康センター組織図



9時30分からは、介護保険における最上町の地域包括ケアの現状と課題についての全体討議が、助言者に吉田文行・厚生省保険局国保課保健事業推進専門官と岸明宏・国診協副会長を迎え、阿部吉弘・小国町立病院長の司会で進められた。行政、医療、ケアマネジメント、サービス提供、保健予防の立場からそれぞれ発表があったが、最上町では、老人保健福祉計画の進捗率が90%を超えており、介護保険制度実施に向けた準備がおおむねできあがっている。中村町長が「ノーマライゼーションの理念に基づく健康長寿の町づくりを具現化する」という町の方向性を明確にされ、指揮命令系統の一本化が行われ、共存・共生・協働の町づ

くりが進められている。佐藤院長の言のごとく、それが行政や福祉法人の職員、町民の心の底の熱い思いとなり、それが「ハード」を動かしている感じがした。われわれ直診を持つ自治体の範となるだろう。

あまりにも学ぶことが多く、2日間の研修を短く感じながら閉講式を迎え、学んだことのいくつかを、わが町に持ち帰って咀嚼し、活用させていただこうとの思いをめぐらせながら帰路についた。

開催にあたってご尽力いただいた関係各位に深甚なる謝意を表したい。本当に実り多い現地研究会であった。ありがとうございました。